



理系にとって大切なのは、 自分の志を具現化できる環境を 見つけ出すこと

昔前と比較すると、理系のキャリアにおける選
択肢は極めて多様になった。さらに、グローバ
ル化の進行、産業構造の変化、終身雇用崩壊、技術革
新スピードの加速など、私たちが取り巻く環境も大き
く変化を遂げており、仕事やキャリアに対する考え方
も転換期を迎えているといえるだろう。そのような現
代社会において、理系学生はどのようなキャリアを考
え、歩んでいくべきなのだろうか。

今回のインタビューに協力いただいたのは、「大学、研
究界と実業界をブリッジする総合エンジニアリング企
業」を理念に掲げ、大学や研究機関との共同研究で豊
富な実績を誇る株式会社構造計画研究所の代表取締役
社長 服部正太氏。大学、民間企業など様々な組織と交
流がある服部氏は、大学時代に研究者を目指していた
自身の経験をふまえ、様々な場で若手人材のキャリア
についてメッセージを送っている。その服部氏から、
「理系学生のキャリアについて考えるべきこと」、「研究
者の活躍フィールドとしての民間企業と大学」といっ
たテーマで話を聞いた。

聞き手 理系ナビ編集部

——社会全体が大きく変化しつつある昨今、長期的な
キャリアについて考えることが難しくなっているよう
に感じます。理系学生がキャリアを考える上でどんな
ことを意識すれば良いのでしょうか。

変化が激しいといっても、「先のこととはわからないか
ら」と、目標やキャリアについて考えることを疎かにし

てはいけません。品川女子学院の漆学長が生徒に話さ
れているのは「28歳の自分を考えよう」ということ。女
性にとって28歳というのは、ちょうど結婚や出産といっ
たライフイベントと向き合う時期。それまでに自分は、
「どこで、どんな仕事を、どんな風にやりたいのか」を
考えるのは非常に大切なことです。

大学生・大学院生であれば、オリンピックが開催さ
れる7年後をイメージするのもいいでしょう。7年間の
うちにできることは結構あります。その時期を一つの区
切りとして、自分の生き方について考えてみてください。
目標設定というと、就職や進学を目標にしてしまっ
ている人が少なくありませんが、そうではありません。就
職や進学の結果、自分はその場所で「どうなりたいの



理系のキャリアを考える [特別インタビュー]

服部 正太

株式会社 構造計画研究所
代表取締役社長 CEO

Shota Hattori

どこで、どんな仕事を、どんな風にやりたいのか
自分の生き方について考えよう

か」を考えてほしいですね。

最近では、みんな急かされるように3年くらいの短いスパンで目標を区切ってしまふことが多いですが、もっと長いスパンで考えてもいいと思います。長いスパンで人生を見ると、時には回り道をしたり、道草を食ったりすることも貴重な経験。友人と遊んだり、恋愛したり、多様な経験が人間を豊かにします。私の友人でも人生で回り道をしている人ほど、まだまだ伸びている。大学卒業後改めて34歳で医学部に入って54歳で教授になつている人や、国家公務員試験に2度落第しながらも現在は局長になつている人などは、人間的にも非常に魅力的です。来年当社に入社予定の内定者も大学を一時期休学して小説を書いていたそうなのですが、非常にユニークな存在。

平均寿命は延びているのに、みな結果を急ぎすぎているように感じます。受験の失敗など、若いうちの挫折は後々振り返ってみれば、長い人生のうちのほんの1年。その時に回り道や無駄と思うような時間があつても、長期的に見れば決して無駄にはならないでしょう。

——確かに目標設定をはじめ、最短距離で目的地まで到達したいという傾向が様々な面で強くなつていようように感じます。回り道をしたからこそ、見えてくるものもありますよね。それでは、目標の定め方についてアドバイスはありますか？

自分のやりたいことや、将来のイメージがなかなか見出し出せなければ、まず、憧れの対象を見つけてはど

うでしょう。個人でも、組織でも、本でもいいので、何か見つかったら徹底的に「追っかけ」を試してみる。とはいえ、人生の目標なんて簡単に決まるものではありません。やるべきことを実践し、人と会つて、考えて、とにかく模索してみてください。

目標は途中で変わつてもいいんです。世の中の変化のスピードはますます速くなり、大学で学んだ知識で一生食えるなんてことはありません。今の自分が持つている知識や環境にとられすぎず、広い視野を持つて自分の進むべき道、目標を決めてほしいですね。学問において真に重要なものは、コンテンツよりも考え方や課題解決のプロセスといったフレームです。フレームさえしっかりできていれば、外部環境が変化しても対応できます。コンテンツは今後ますます新陳代謝が求められ、実際に変化していくでしょう。

——大学に残り、研究者を目指したいと考える理系学生も多いと思いますが、民間企業における研究職との違いはどのような点にあると考えますか？選択の際に注意すべきことがあればお聞かせください。

「民間企業は資本主義市場だから公益的な研究ができない」と極端に考える方もいますが、民間企業であつても公益的な研究が出来る場はもちろんあります。民間の場合は、比較的短期スパンで成果を出すことが求められるので、自分への評価が分かりやすいという面があります。そういった環境が好きな方は民間企業の方が向いているでしょう。

——最後に、理系学生が企業や研究室を選ぶ際に考えるべきことを聞かせてください。

「技術を通じて新しい価値を社会に創り出す」というのが理系の本質的な価値です。その価値を高めていくことで社会に貢献し、対価を得ることが出来るのが理系であり、エンジニアリングの面白さ。ですから、理系にとって本当に大事なものは、「自分の考えを具現化できる環境を見つけ出すこと」といえるでしょう。それができる環境はどこにあるのか、自分と相性は合うのか、しっかりと見極めてください。いい企業」と、相性が合う企業、は違います。

組織も人間と同じように多様性があります。適性を見極めるためには、ネットにある情報だけでは絶対わからないので、自分の目で見て、聞いて、考えてください。組織やそこにいる人と面と向かつて感じた直感は馬鹿にできません。直感は過去の経験から生まれるものから、意外と正確なものです。

もう一つアドバイスをする、組織で見るべきなのは、リーダーがビジョンやミッションをしっかり持っているかどうか。リーダーが目指すのと同じベクトルで、自分の志に専念できる環境があるかどうか、しっかりと見極めてください。企業ブランドや世間体、給与がちょっと高いといった目先の満足ではなく、長期的な視点で志を貫ける環境はどこか、しっかりと考えてほしいですね。

大学など公的機関ゆえの魅力というのは、やはり先進的なテーマの、パイロット研究、に取り組めるということ。とはいえ、研究テーマを決める分には自由度が高いかもしれませんが、大学においても研究費をいかにして確保するかは重大な問題です。資金集めをしていくうえで、外部からの評価と無縁という訳にはいきませんので、そのような面も理解する必要があります。大学で研究者を目指す方に気を付けてほしいのは、社会との接点を絶やさないこと。学会でいろんな人に会ったり、複数の民間企業の方と接点を持つたりと「社会の流れはどうなつてきているのか」という視点を常に意識してほしいですね。


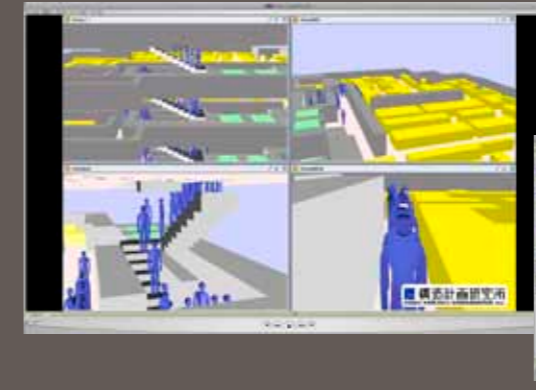
——産学連携を標榜している構造計画研究所は、大学との共同研究に数多く取り組んでいますね。

耐震構造設計、自然災害、電波伝搬、消費者行動分析など様々な領域で大学と共同研究を行い、実業へ橋渡しすることを当社はミッションとして掲げています。社内には、共同研究を通じて博士号を取得したり、論文を学会で毎年発表している所員が数多くいます。最近では公的機関と組んで電波周波数の世界統一規格を決めるプロジェクトに参加したり、国が定める海上風力発電の建築規格策定の会議に参加したりと、社会の制度、仕組みづくりに関わる仕事も増えてきました。民間企業と一口に言っても、働き方や取り組む研究分野は様々です。広く視野を持って、自分に合った環境を探してみてください。



●プロフィール
株式会社 構造計画研究所
代表取締役社長 CEO
服部 正太(はっとり・しょうた)

1956年生まれ。東京大学教養学部教養学科国際関係論を卒業。同大学院を経て、マサチューセッツ工科大学大学院に留学し、社会システム論、意思決定シミュレーションを専攻する。ポストコンサルティンググループ勤務を経て、1987年構造計画研究所に入社。2002年より現職。



産学がつながって生まれる新しい価値

構造計画研究所は様々な領域で大学や民間企業と共同研究に取り組み、「工学知」を社会に還元している。左の画像は、マルチエージェントシミュレーションを用いて、高層ビルにおける火災発生時の避難完了時間や避難者密度など、多方面から避難安全性を評価する「超高層ビル用火災時避難シミュレーションシステム」。